

チェーホフの創作とダーウィンの進化論の関係

高 田 映 介

はじめに

本稿はチェーホフの創作とダーウィン進化論の関係についての研究ノートである。まず、ある時点で人間の世界認識を大きく動揺させたひとつの考え方としてダーウィニズムをとらえる。これを踏まえ、『種の起源』着想の一因となったマルサスの人口論とも関連する形で、ロシアにおけるダーウィニズム受容の一般的傾向を科学界と文学界の両面から概観する。最後に、ダーウィニズムについてのチェーホフの理解には独自の性格が見られることを指摘し、それはチェーホフの創作の本質にもつながることを述べたい。

1-1. 19 世紀のパラダイムとしての進化論

ダーウィンの進化理論は、今日では総合説（ネオ・ダーウィニズム）としてすでにその科学的正当性を確立している。しかしながら、理論の一義的結実はようやく 20 世紀に入ってからなされたことを忘れてはならない。19 世紀の時点では、進化論はまだそれ自身の手でパラダイムを修正する以前の状態にあったのであり、自然に対する「別の見方」¹として十分馴染んでいたわけでもなかった。さらに言えば、科学の領域を一步踏み出せば、進化論は未だ多義的に揺れ動いている。現代思想家の吉川浩満は、私たちの日常に進化論風の用語（ダメなものは淘汰される、等）が氾濫する事実を挙げ、私たちが上昇志向型の発展的社会進化観でもってダーウィンの進化論を理解していると「誤解」していることを指摘している。² 吉川によれば、「進化論は、生物の世界を説明するための科学理論というだけでなく、この世界そのものを理解するための基本的な「物の見方」「思考の枠組み」「世界像」「世界観」と呼べるようなもの」であるがために、人々は進化論の上に共通理解を打ち立てその用語を使用できるのである。³

¹ Thomas S. Kuhn, *The Structure of Scientific Revolution 2nd ed.* (Chicago: Enlarged, 1970), pp. 52-53.

² 吉川浩満『理不尽な進化』朝日出版社、2014 年、94-114 頁。

³ 同上、15-16 頁。

科学が世界観であるというのは何ら不思議な事ではない。なんとなれば、近代科学の勃興期において世界の始まりを探る試みの根底にあるのは聖書の「創世記」であった。それも「創世記」からの脱却が目指されたのではなく、むしろ反対に、聖書に書かれた事柄を文字通りに解釈すべき事実として受け取り、それこそが自然界の起源の真の説明であることを証明しようとするのが16, 17世紀における科学の努力だったのである。河田雅生は、「古い時代から十七世紀頃まで」支配的だった「人を頂点としてもっとも下等な生物まで、すべての生物種は、単一の系列でつなぐことができる」「それぞれの生物種がその系列の中でどの位置に存在するかは、生物が神によって創られた最初の時から決まっており、その序列は決して変わることはない」という「存在の連鎖」の考え方を崩さないため、というよりもむしろ補強するために、リンネによって多様な生物の分類体系が示されたことを指摘している。⁴

これを踏まえてブロックハウス・エフロン辞典の次のような記述に目を向けよう。「ダーウィンの名は一人の学者の範囲に収まらない知名度を獲得した。彼の理論は、概して、学問の歴史に前代未聞の衝撃をもたらした」。⁵ここに付け加えるならば、ダーウィニズムが衝撃をもたらしたのは学問領域に対してだけではなく、文学の領域に対してでもあり、あらゆる世界に対してだった。アダム・フィリップスは「一九世紀後半のヨーロッパという新世界は、神がいなくてもよい世界であり、神の目的に近づいていた世界ではなかった」と述べつつ、次のように分析している。

神による生の認可がないとしたら、怒りを鎮めたり好印象を与えるべき神の存在がいなかったら、人は、生き続けるための糧としていかなる自己正当化の物語を語れるのだろう。これこそ、ダーウィンとフロイトが生まれ落ちた一九世紀という時代の、信仰の危機だった。⁶

われわれが注目するのは、マンデリシュタムの言葉を借りて言えば、「すべての危機的な世紀」に「世界観のための闘技場」⁷であるようなこの自然科学、ダーウィンの進化論である。したがって本稿は一枚岩の純粋な科学理論としての進化論の知見を文学に「応用」しようと試みているのではない。今では自明のもののようにってしまった「物の見

⁴ 河田雅生『はじめての進化論』講談社、1990年、22-23頁。

⁵ Энциклопедический словарь. Репринтное воспроизведение издания Ф.А. Брокгауз, И.А. Ефрон. 1890. Т. 19. СПб., 1991. С. 134.

⁶ アダム・フィリップス（渡辺政隆訳）『ダーウィンのミミズ、フロイトの悪夢』みすず書房、2006年、138頁。

⁷ Мандельштам О. Собрание сочинений в 4 томах. Т. 3-4. М., 1991. С. 133.

方」がロシアの受け取り手に呼び起した抵抗や賛同の様々な反応を見直し、中でも作家たち——もちろん、最大の関心はチェーホフに払われる——が、個々の関心のありかにしたがって、ダーウィンの理論が「どこまで、世界のありようを解釈する手段として決定力を持つ物語になり得るのか」⁸を試したさまを指摘することがねらいである。

1-2. 進化論という物語り

では、ダーウィンの進化論はそれ以前の進化論とどの点において決定的に異なるのか。それは、同一の種内にも存在する変異をきっかけに生き物が変化していくメカニズム、すなわち自然淘汰によって、進化現象をまったく自然主義的に説明する方法を考え出した点、そして、そのことによって進化の過程に偶発性の概念を体系的に取り入れた点にある。吉川の次のような指摘は重要だ。

この考え〔自然淘汰説——筆者註〕はラマルクやスペンサーの発展的進化論が想定した進化の発展法則を不要にする。[...] 発展的進化論の進化観においては、あらゆる生物は「存在の連鎖」(chain of being)——もっとも下等なものからもっとも高等なものまでが連続的につながった階梯——の一員である。そこでは進化とは、共通の目標へと向かうこの階梯を上昇していく過程にほかならない。それぞれの生物種はその階梯における位置によって優劣を比較することができるし、あるべき未来の姿を予言することもできる。

それにたいして、ダーウィンの進化論(ダーウィニズム)においては共通の目標など存在しないのだから、進化の過程は偶発的なものになる。進化には目的も終点も存在しない以上、ある生物種とべつの生物種の優劣を直接に比較することなどできなくなるし、あるべき理想の状態や未来の姿といったものを予言することも不可能になる。⁹

後の議論にも関わってくるので、ラマルクの進化論について付言しておきたい。ラマルクは、生物は順次自然発生しており、その形態は単純から複雑へと順序良く進化していくと考えていた。したがって最古に発生した生物が現在もっとも進化した生物だということになり、彼による動物の配類は、結局「存在の連鎖」のそれに似る。ラマルク自身の意図がどうであったにせよ、彼が想定していた世界はかなりの程度安定したものだったのであ

⁸ ジリアン・ピア(渡辺ちあきほか訳)『ダーウィンの衝撃——文学における進化論』工作舎、1998年、14頁。

⁹ 吉川浩満『理不尽な進化』160-161頁。

り、変化を認めるにしてもやはり恒常性の方が重視されている。何よりも、彼は自らの配類の最高位に哺乳類——人間——を置くことをためらってはいない。

これに対しダーウィンは、自然も宇宙も彼のためにつくられた、他の全生物の頂点に立つものとしての人間観を突きくずそうとする。そして、変異は人間という「目標」に向かっているのではなくランダムなものであり、それ自体には進化の方向性を決める力が内在しないと考えた。彼は小さな変異の累積による進化が漸進的に進むと見なしたが、その歩みに特定の方向性や目的を見出すことはしなかったのである。ダーウィンの目が見つけたのは、ピアによれば、「二重の豊かさをたたえた世界」、「発達と死滅の可能性をともに秘めた、あふれんばかりの現在の基盤」¹⁰ である。生物は変化し、環境もまた変化する。このような環境の中では日常は永遠ではありえず、意志や努力は常に達成されるとは限らない。このようにしてダーウィンは偶然・失敗・死などの人間になじみの問題を自らの理論に持ち込む。たとえばそのことを彼は次のように述べる。

未来を予測するなら、現時点で勝利を収めている大きなグループ、ほとんど打ち負かされていないか、まだほとんど絶滅させられていないグループは、この先も長期に渡って増加を続けることだろう。しかし、そのグループが最終的に繁栄するかは誰にも予測できない。なぜなら、誰でも知るように、かつては大成功を収めていたのに今は絶滅してしまったグループが多く存在するのだから。¹¹

連続的な変化の積み重ねというプロセスが基本的に働いているとしても、最終的にどのような結末が生じるかは誰にも分からない。「存在の連鎖」に基づく静的な「階段」とは異なり、ダーウィンは進化のモデルとして「生命の樹」、つまりもっと複雑で予測不能な動きを考えたのであった。

強調しておきたいのは、ハックスレーが認める通り、そもそも進化とは「子どもをその子自身の誕生の目撃者としてさし出せない」と同じく「裏付けとなる証拠を探すことはまったく絶望的」な現象であるということだ。¹² それ故グループは次のように述べている。

¹⁰ ジリアン・ピア『ダーウィンの衝撃』69頁。

¹¹ Darwin, Charles *The Origin of Species by means of natural selection or the preservation of favoured races in the struggle for life* (Harmondsworth: Penguin Books, 1968), pp. 168-169. この本には『種の起源』初版のテキストが収録されている。以後『種の起源』からの引用は括弧内に頁数を示す。日本語訳についてはダーウィン（渡辺政隆訳）『種の起源 上下』光文社古典新訳文庫、2015年を参考に、一部改変した。

¹² Thomas H. Huxley, *Science and Hebrew Tradition Essays* (New York: D. Appleton and company, 1896), p. 73.

「ダーウィンは、もし生物が歴史をもっているのなら、祖先のいろいろな段階で“痕跡”が残されているはずだと推論した。現代では意味を失っている過去の痕——無用のもの、奇妙なもの、特異なもの、不釣り合いのものなど——は、歴史があることを示すしるしである。これらは世界が今ある形で作られたのではないという証拠である」。¹³ このようにしてダーウィンは家畜植物における個体の変異に着目し、仮説を構築することで進化現象を「語る」歴史科学の方法をも確立した。別言すれば、ダーウィンは進化のしくみ（自然淘汰）を自然科学的に「説明」しながら、同時に、そのプロセスが作り出してきた「生命の樹」——少数の祖先から分岐してきた生物種の類縁の網、すなわち生物が描いてきた歴史について「語って」いるのである。エリオット・ソーバーによれば、この二点を等しく組み合わせたところにこそ、ダーウィニズムの独創性が存在している。¹⁴

生物種の長大な時間に渡る動きや変化を説明しつつ、彼らの歴史を「語る」という点で進化論もまたひとつの「物語り」であると指摘できる。生物進化についてのこの「物語り」は、しかしながら、予定表などは存在せず、予想できない偶発性に左右されている。高度な器官である眼を例に考えてみたい。ダーウィンの語り方にしたがうならば、自然淘汰の積み重ねによって、複雑かつ精巧な「眼」のような器官を作り上げることは可能である。多様な個体が存在し、生き残るために闘争した結果、物を見るのに適した特徴を持った個体が子孫を残し、目が現在あるような形になったということになる。ここに「誰か」の特別な意志や目的が介在する必要はない。とはいえ目のような複雑な器官が一挙に出来上がることはあり得ないので、一つ前の段階と次に来る段階の間にはあくまでも連続性が存在する。つまり、ひとつひとつは連続的に生じる原因が累積し、「偶然」にも今あるような形になったという結果が生じるのである。このようにダーウィンは「現在こうである」「しかし、こうでなくてもよかった」ものとして進化を「語る」。だが、これは人間の一般的な考え方に反している。眼は「物を見るため」に「発達」してきたという風に普通人間は考える。むしろ私たちはそのような目的論的思考においてしか物事を想像することができない。それ故、ダーウィン研究者の小川真理子が指摘しているように、「世界に一切目的がない」というダーウィンの物語のテーマは「もっとも重要でありながらもっとも理解されにくかった」。¹⁵ そして、まさにこの点にダーウィンの理論の難解さと豊かさがひそんでいる。ロシアの社会思想家、自然科学者そして文学者の間に見られたさまざまな反応が、

¹³ スティーブン・グールド（櫻町翠軒訳）『パンダの親指——進化論再考 上』ハヤカワ文庫、1996、36-37 頁。

¹⁴ エリオット・ソーバー（松本俊吉ほか訳）『進化論の射程——生物学の哲学入門』春秋社、2009 年、25 頁。

¹⁵ 小川真理子『甦るダーウィン：進化論という物語り』岩波書店、2003 年、66 頁。

ダーウィン進化論のこうした面をより明らかにしてくれるだろう。以下、ロシアにおけるダーウィン受容の流れを概観する。

2-1. ロシアにおけるダーウィン受容——思想界と科学界

『ロシヤ ダーウィニズムの先駆者たち』の著者ライコフによれば、「ロシア科学の創始者であり天才学者であるロモノーソフは、すでに18世紀にはっきりと地質学のなかで進化の観点に立ち、この観点を全自然に移していた」。¹⁶ トーデスもまた『ロシアの博物学者たち——ダーウィン進化論と相互扶助論』の中で、「ロシアは強固な創造説の伝統を欠いており、すでに（ダーウィン以前に——筆者注）何人かの進化論者を生み出していた」ことを明言している。¹⁷

進化思想の伝統が存在し、実際にダーウィンの著作が全体として好意的に受け入れられたにも関わらず、ロシアにおけるダーウィン受容は、決して平坦な道のりではなかった。H.Г. ミフノヴェッツはこれを「第一波」と「第二波」、すなわち最初の翻訳が出た1860年代に起こった論争と、1885年にダニレフスキーの『ダーウィニズム、その批判的研究』が出版された関係でロシアのジャーナリズムで再び生じた、1887-89年の論争の二つに区分している。¹⁸ ダニレフスキー自身は著作が刊行された時すでに他界していたので、反対派の筆頭にはストラホフが立ち、これに正統派ダーウィニズムの擁護者チミリャーゼフが応答した。出版人のエリペなども加わったこの論争は、『種の起源』ではダーウィンが注意深く避けた人間の道徳性への具体的言及を含む『人間の由来』が紹介された関係で高まりつつあったダーウィンへの批判と相まって、60年代の論争よりもいっそう鋭いものであった。

とはいえ、「第一波」と「第二波」に質として微妙な差があるとはしても、ロシアの知識人たちがダーウィンの理論のどのような点に拘泥したのか、それを突き詰めていけば、この二つの論争の奥に横たわっているのは同じひとつの根なのである。この点に関連して、トーデスは特に「生存闘争 (struggle for existence)」という隠喩に注目する。トーデスによれば、この「隠喩」の「概念的な意味合い」に対するロシアの知識人の批判的な反応が「ロ

¹⁶ ベ・イエ・ライコフ（亀井健三訳）『ロシヤ ダーウィニズムの先駆者たち』たたら書房、1969年、3頁。

¹⁷ ダニエル・P・トーデス（垂水雄二訳）『ロシアの博物学者たち：ダーウィン進化論と相互扶助論』工作舎、1992年、50頁。

¹⁸ См. Михновец Н.Г. А. П. Чехов в контексте полемики о Чарльзе Дарвине 1860-1890-х гг. // Чехов и время: Сб. статей / ред. Е.Г. Новикова. Томск, 2011. С. 133-149.

シアの進化思想に重要な結果をもたらした」。¹⁹ すなわち、生物の個体数が指数関数的に増加するのに対して、生活の糧を同じ比率で増加させることができないため、生物の個体数が食物の生産能力以上に過剰になる時が必ずやってきて、それらの生物のそれ以上の増殖に対するなんらかの抑制が生じてくるというマルサスの学説と、イギリスの富裕層の社会的地位および政治的態度との間には複雑に絡み合った関係が存在する。ダーウィン自身富裕層に属するジェントルマンであり、マルサスの見解をあり得そうなこととして持論に適応した限りにおいて、彼もまたイギリス社会の特質を基礎に置いていたことは否定できない。いずれにせよ、ダーウィンの進化理論と共にマルサスの見解をも受け入れざるを得なくなった時、ロシアの知識人たちはまさにここに躓いたのである。トーデスは指摘している。

ロシアの政治経済は、親自由放任主義的な活発なブルジョワジーを欠いており、領主と農民によって支配されていた。主要な政治的潮流であった君主主義と社会主義的志向をもつナロードニキ主義は、協調的な社会精神と、マルサスおよび大英帝国に広く結び付けられる競争的な個人主義に対する嫌悪を共有していた。さらに、ロシアは急速に変化し、しばしば厳しい気候を伴う広大で、人口の希薄な大地をもっていた。限られた空間と人口（個体数）の圧力によって生物はたえず相互の抗争に押しやられるというマルサスの見解に、これ以上に同調し難い舞台ごしらえを想像するのは難しい。²⁰

この点に関連して E. コルチンスキーは「ロシアのチャールズ・ダーウィン受容の初期から、彼の考えはこの国の科学の象徴になった。それゆえ、彼の考えは科学を敵視する人にとっての憎悪の主要な対象ともなった」²¹ と述べている。このようにして、ロシアでは様々なイデオロギー的立場に立つ論客が、ダーウィン＝マルサス連関の批判という形で科学が人間および人間社会に与える影響に関する自説を展開したのである。保守派の思想家（ダニレフスキー、ローザノフ、ストラホフ、のちにはソロヴィョーフら）は宗教的、道徳的、社会的政治的観点から、ダーウィン＝マルサス連関の文化的主観性を指摘し、ロシアの民衆に対して、実証的知識を装った西洋的価値観の輸入に反対するよう警告した。M. マグワイアが言うように「人類の神の起源と独特の運命の不認可は、ロシアのユニー

¹⁹ ダニエル・トーデス『ロシアの博物学者たち』、12 頁。

²⁰ 同上、332 頁。

²¹ Eduard I. Kolchinsky, “Darwin’s jubilees in Russia”, in Thomas F. Glick and Elinor Shaffer, eds., *The Literary and Cultural Reception of Charles Darwin in Europe*, vol. 3 and 4 (London, New Delhi, New York and Sydney: Bloomsbury, 2014), p. 288.

クな国家のアイデンティティを故意に徐々にむしばむことに等しかった」²² から、急進派や自由主義者（ピーサレフ、アントノーヴィチ、プレハーノフら）は差し迫った革命のための科学的基盤をダーウィンに見出し称揚したが、マルサスの理論が農民共同体の理念に明らかに反するので、ジレンマを抱えることになった。つまり、スラブ派と西欧派の対立の流れを汲むこれらの二つの一見異なる立場は、実のところダーウィン＝マルサス連関に対する困惑という同じものをめぐるっていたのである。

社会思想家だけでなく科学者もまた、マルサスの政治的立場に対する否定的反応とマルサスの自然観に対する常識的な意味での共感のなさが組み合わさった複雑な「感情」とらわれた。幅広い生物学の分野と多様な政治的立場を代表するロシアの科学者たちが、「自分たちの文化にとってあまりにも異質で、あまりにも重い否定的な連想を背負わされた隠喩」²³ の重要性を減じたり否定したりする過程で今日にも先立つような多くの科学的発見を成し遂げ、種の違いさえ越えた助け合いが進化を促したとする独自の「相互扶助説」が最終的にロシアで作られたのである。

「ロシアのダーウィンのブルドック」こと K.A. チミリャーゼフはほとんど唯一と言える例外だった。1864 年の時点でチミリャーゼフは次のように述べている。「われわれが慣れ親しんでいる永遠に清らかで、ほほ笑む自然に代わって、[...] 驚愕するわれわれの前に、恐ろしい混沌が立ち上がってくる。そこでは、生物たちは残忍な命懸けの戦闘に巻き込まれており、あらゆる生物は、自分の同類たちの何百万という死体の上に生命の一員となるのだ」。²⁴ 変異は前適応的なものでなく、それが遺伝によって蓄積され、「盲目的」性質の自然淘汰によって生物が変わっていく。その動因としての生存闘争の「比喩的」意味合いを認めていたこと、そして何よりも、「あらゆる生物は、自分の同類たちの何百万という死体の上に生命の一員となる」ことを認めていた点で、チミリャーゼフはダーウィンの理論の骨子を確実にとらえていた。しかしながら、ロシアの知識人たちを困惑させた「隠喩」の呪縛から、彼とて完全に解き放たれていたわけではなかった。「生存闘争」という表現のためにダーウィンの理論が誤解を受けることを憂慮するチミリャーゼフは、次々と表した自らのダーウィン進化論の解説書の中で、次第にこの表現を大幅に削減していき、それにとまって、闘争とは「自分と同類の生物の撲滅を意味するものではなく、自己防衛——有機的自然の敵対的な力に対する生命の勝利——を意味するだけであった」と意味

²² Muireann Maguire, “Darwin’s Reception in Twentieth-Century Russian Prose and Science Fiction”, in Thomas F. Glick and Elinor Shaffer, eds., *The Literary and Cultural Reception of Charles Darwin in Europe*, vol. 3 and 4 (London, New Delhi, New York and Sydney: Bloomsbury, 2014), pp. 268-269.

²³ ダニエル・トーデス『ロシアの博物学者たち』, 90 頁。

²⁴ *Тимирязев К.А. Сочинения. Т. 7. М., 1939. С. 129.*

をずらしていく。クロボトキンに対する彼の控えめな、しかし確実な賛意が示す通り、「闘争」を「競争」に置き換え、独自で高度な生物としての人間がこの競争中に発揮するに違いない「漸進的な道徳的・知的進歩」を確信する立場へと移って行くのである。²⁵

ミフノヴェッツが物活論の主要な論客であるテイヤール・ド・シャルダンを引用しながら、「イギリスの自然科学者の労作は、文化の中に進歩という強固な理念をもたらした」と述べていることは、ダーウィン自身はここで言われているような「進歩」を意図していなかった点を見落としているが、正しい。²⁶ 吉川の言葉にしたがえば、「目的論的にしか理解できない事象を結果論的に説明する革命的理論」をダーウィンが表したことで「近代人の思想」に住み着いたのは、むしろ「それ以前から醸成されていた近代的進歩史観の進化論版である「発展的進化論」であった。²⁷ ダーウィンの理論が「まだ科学的事実とは言えない」²⁸（現在の進化生物学の主潮が確立されたのは1940年代に入ってからのことである）ものだった19世紀当時、ましてクリミア戦争後の国家の転換期に「進歩」の必要に焦りを感じていたロシアにあって、ダーウィンの進化論は発展的進化観とないまぜになっていた。むしろ、そのようなものとしてこそ積極的に受け入れられたと言えよう。

以上をまとめるならば、非マルサス主義に貫かれていたために、どれほど意識的だったかは別としても、ロシアの思想家たちによって、また科学者たちによってさえ、ダーウィンの理論は局所化され、目的や意志が介在しない自然淘汰のプロセスを説明し、そのプロセスが描いて来た生物の歴史を「語る」という本質は理解され得なかった。ロシアの知識人たちがダーウィンを通して見ていたのは、結局のところ進化を進歩と同一視する「社会ラマルキズム」とでも呼ぶべきものだったと言っても過言ではない。

2-2. ロシアにおけるダーウィン受容——文学界

ダーウィンの理論の受容において、トルストイやドストエフスキーといった文学者を含む知的サークルもまた大きな役割を果たしたことは言うまでもない。そもそも19世紀の文学と進化論の結びつきは深い。ダーウィン自身がモンテーニュ、トマス・ブラウン、スコット、プレスコットらの文学的影響を背景に種の発生過程をめぐる自説を作り上げていっ

²⁵ ダニエル・トーデス『ロシアの博物学者たち』、316-324頁。

²⁶ Мухомов Н.Г. Учение Дарвина и его культурный феномен в осмыслении Толстого // Яснополянский сборник. Тула, 2010. С. 235.

²⁷ 吉川浩満『理不尽な進化』164-165頁。

²⁸ Kuhn, *The Structure of Scientific Revolution* 2nd ed., p. 53.

たのである。²⁹ 他方文学の領域では、ダーウィニズムがもたらした世界認識の大転回——人間は特別な存在ではなく、他の動物同様に死すべき運命にあり、死後に戻ることができたはずの場所は消失し、幸福は約束されていない——に対して個々の作家がそれぞれの反応を示した。科学哲学者のミシェル・セールが指摘しているように、一見して分かる直接的な利用という形ではないにせよ、モチーフやテーマ、プロット構成の点で進化論は所与の文学作品の重要な関連テキストであると言えることができる。³⁰

進化論と英語文学の結びつきは他の言語の場合よりも強いものであり得るだろうし、この結びつきについては多くのことが書かれている。さらに、ゾラを筆頭として自然主義文学に対する進化論の影響についても、多くのすぐれた研究がなされてきた。一方で、ロシア文学に対する進化論の影響についての指摘はあまり見られないことは、否定できない。それでも、すでに述べた通り、進化理論を科学としてだけでなく、社会・政治・思想分野におけるパラダイムとして、「世界観のための闘技場」としてとらえる観点からは、ダーウィニズムとロシア文学の関係をさぐる意義がある。以下ドストエフスキーとトルストイ、そしてチェーホフの「読みの行為」を分析したい。もちろん、この三者を取り上げるだけでロシアの文学領域における進化論の受容の全貌を詳らかにすることはできない。しかし、この三者は受容の大きな傾向を代表しているし、そうした傾向を指摘するだけで本稿の目的には十分であると考ええる。

ダーウィンの理論に対する拒絶反応を、ドストエフスキーは次のようにはっきりと書き表している。

ついでながら、昨今のダーウィンの、また他の、人間が猿から由来したという理論を思い出し
てほしい。どのような理論に入りこむこともなく、人間には動物的な世界以外に精神の世界が
ある事をキリストは直接説明してくれる。まあ、人間がどこから来たかということは、どこだっ
ていいでしょう（聖書にも、神がどのように人間を砂から作ったか、どのように大地から取り
上げたかは全然説明はされていない）。その代わり神は人間に精神世界を吹き込んだのだ。³¹

ドストエフスキーは精神世界の有無で人間を動物から分離した存在として捉えている。ダーウィンはそれと異なり、一般的に「下等」と見なされる動物にも人間と同等かそれ

²⁹ Gillian Beer, “Darwin’s Reading and the Fictions of Development,” *The Darwinism Heritage*, ed. D. Kohn (Princeton: Princeton University Press, 1985), pp. 543-588. 参照。

³⁰ ミシェル・セール（寺田光徳訳）『火、そして霧の中の信号』法政大学出版局、1988年、261-262頁。

³¹ Достоевский Ф.М. Полное собрание сочинений в 30 томах. Л., 1972–1990. Т. 29 / 2. С. 85.

以上の高い精神の働きを認めていたことは、晩年に熱中したミミズの研究からも明らかである。それは虚無主義というよりはむしろ新しい人間的生き方の積極的な模索であった。しかしながら、ミハイロフスキーが言うように、ダーウィンの理論は当代において人間を神から「切断」した。³² そしてそのことが、ドストエフスキーにとってはもっと重大な違反に思われた。ダーウィンの『種の起源』で人間を黙殺することによってほめかしている、神と自然の名誉ある媒介者ではなく、他のあらゆる生物同様生き残りをかけた自然の闘争に巻き込まれている動物としての人間像は、キリスト教的理念、因果律を超える個人の自由な意志、利他主義、平等、兄弟愛など、ドストエフスキーにとって重要だった諸概念と鋭く対立している。『地下室の手記』で「人間の先祖は猿だという証明をつきつけられたら、四の五のいわずに、あっさりそれを認めるしかない、ということだ。またきみにとって、きみ自身の脂肪の一滴は、本質的には他人の脂肪の数十万滴よりも貴重なものであるはずだから、したがって、いわゆる善行とか義務とかいったさまざまな妄想や偏見も、結局のところは、すべてそこに帰着するのだ、と証明されたら、やはりそのまま認める、ということだ」³³ という地下室人の言葉が逆説的に示す通り、「下等な」動物たちがそうしているように、人間も「同類のその十万滴」より大事な「自分の脂肪の一滴」を守るために互いに闘争しているとすれば、一切の知的精神の発露もまた、種の保存という本能に突き動かされた結果に過ぎないものになる。このように、科学の理論がすべてを決定してしまい、かつては神の特別な創造物であった人間が自然と自然法則の奴隷に堕ち、そのために自らの主人であることすら放棄してしまうことをドストエフスキーは危惧する。

興味深いのは「ドストエフスキーはおそらくダーウィンの自然科学理論そのもの、ダーウィンの著作のテキストそのものを読んではいなかっただろう」というミフノヴェッツの指摘だ。彼女はこう説明する。「そのことは、とはいえ、彼にとっては不可欠なことではなかった。ドストエフスキーにとって重要だったのはダーウィンの著作ではなく、ダーウィンの考えたことの「可変性」と、広く大衆に対する科学理論の人気現象だった」。³⁴ ドストエフスキーが問題にしていたのはダーウィンの科学理論自体ではなく、理論が社会に応用された場合の影響力であったとすれば、彼が注目していた「ダーウィン」とはむしろ「社会ダーウィニズム」に近いものだったとすることができるだろう。ドストエ

³² Михайловский Н.К. Сочинения. Т. 1. СПб., 1896. С. 412.

³³ ドストエフスキー（江川卓訳）『地下室の手記』新潮文庫、24 頁。

³⁴ Михновец Н.Г. «Дарвиновский» дискурс в зимних заметках о летних впечатлениях и записках из подполья Ф. М. Достоевского // Su Fëdor Dostoevskij Visione filosofica e sguardo di scrittore ред. Stefano Aloe. Napoli. 2012. С. 139.

フスキーはこのような立場を保持した。

本稿の関心にとってより重要なのはトルストイである。トルストイがダーウィニズムとの論争に入ったのはずっと遅く、ダーウィニズムの「第二波」、すなわち 1887 年からしばらく続いた論争に関連してのことであった。コルチンスキーは、論争の主役のひとりであるストラホフとトルストイを、ダーウィンの理論に疑義を呈する「保守派の思想家」に一律に加えている。一方ミフノヴェッツは、トルストイがほかでもないそのストラホフへの手紙の中で、論争のもう一人の主役チミリャーゼフに対しひそかに称賛を示したことを指摘し、作家は論争から一步引いた地点にいたと見なしている。³⁵

いずれにせよ、ダーウィン＝マルサス連関についてだけ言えば、科学を人間の倫理に適応することを危険視する点で、ストラホフとトルストイの見解は近い。『さらば我ら何をなすべき』(1884-1886) に表されたトルストイの考えによれば、マルサスの理論は『科学』という偉そうな言葉を持ち出して効果を狙っている」にすぎない。すなわち、人間の一部にだけ重労働を押し付け、自らは労働から解放された状態でいたいと思う人たちを正当化するための詭弁にすぎない。ダーウィンはこのようなマルサス的な見解を自然にまで延長することによって、人間の「怠惰と残忍さ」を正当化したのである。世界には常に人間同士の争いが見られたことについてトルストイは認めていたが、彼に我慢ならなかったのは、生物はすべからず自己の保存を目的として生きているという「生存闘争」の概念をダーウィンが「生命の進歩の基礎においた」ことであり、そのために人間共同体の根本は何よりも生存を懸けた個体間の闘争であると見なされるようになったことであった。これに反対してトルストイは、ホップズ的な「万人の万人に対する闘争」状態を停止し、人が「その避くべからざる義務であるところの隣人に対する愛」と「同朋人類共通の目的」に仕えるときにのみ、人間は人間であるに足るものと結論する。この結論は、その根本にかなりの程度人間の独自性と人間の道徳性の漸進的な進歩への期待を含んでいるし、生物間の足の引っ張り合いではなく、全体的な助けあいを強調する点で、相互扶助論との呼応もここに見てとれる。³⁶

しかしながら、トルストイの理解の内でもっと興味深いのは、彼が「何人も未だかつて或る種の有機体が他の有機体より造られたのを見たことがない」、「したがって種の起源についての仮定は永遠に仮定にとどまり、経験的事実となることは決してない」のだから、進化理論は「種の起源の問題」を「新しい形式で反復していたにすぎない」と明言してい

³⁵ Kolchinsky, "Darwin's jubilees in Russia", p. 288. : Мухомов. Учение Дарвина и его культурный феномен в осмыслении Толстого. С. 256.

³⁶ Толстой Л.Н. Полное собрание сочинений. Т. 25. М., 1937. С. 182-411.

ることだ。³⁷ 上述したように、進化とは再現することも目撃することも不可能な足跡のない現象である。自然淘汰のプロセスは、それゆえ、「環境によりよく適したものが結果として生き残る」「生き残ったものが結果としてよりよく適していた」というトートロジカルな形でしか説明できない。³⁸ 進化の理論にトートロジー的なものが含まれることを看破したトルストイは、ダーウィニズムは玩具のようにいたずらなものとして退ける。ここには理論破綻に対する嘲笑以上のものがこめられているように思われる。上の引用のしばらく後で、トルストイは次のように述べているからである。

進化理論によれば、生物の多種多様性は、偶然性と遺伝と環境の多種多様な条件が無限に長い時間にわたって影響したためだということになる。進化論は簡単な言葉で言うと、偶然性によって、無限に長い時間の間に、どんなものからでも好きなものが生じる、ということを主張しているのである。³⁹

事実、「適者は事後的に定義されざるをえない」というダーウィニズムの適応主義は、一方で、自然淘汰の母集団は予見可能な目的や一種の予定表のようなものではなく、「ランダムな変異および組み換え」でしかないという「積極的事実に対応している」。⁴⁰ 第一章で述べた通り、そのような自然淘汰のプロセスによって、特別な理由や意志を介在させることなく、「偶然」に基づく生物の来し方を「語る」のがダーウィンの画期的な点であった。そしてトルストイは「問いに対する答え」が存在せず、「意志の代わりに偶然性」が置かれたことに憤るのである。このように考えた時、われわれは、1860年代にトルストイが取り組んでいた問題がここにリフレインしていることに気がつく。端的に言えば、それは、ケプラー、ニュートン、ガリレイらの科学革命が起こった後、コントの実証主義が台頭した後で必然的に生じた、科学の「説明」と人間的歴史の「理解」をめぐる哲学的問題である。『戦争と平和』のエピローグでトルストイは次のように述べていた。

歴史にとって存在するのは、人間の意志の運動の線であり、その線の一方の端は不可知のもの

³⁷ Там же. С. 336-338.

³⁸ 進化理論のトートロジー的性格をめぐるのは、「進化論は科学足り得るのか」という長きに渡る論争があった。カール・ポパーはトルストイ同様、反証不可能性に注目し進化論の科学的正当性を批判した。しかしながら、科学の専門領域においては、リチャード・ドーキンスらが主張するように、適応主義を自然界のアルゴリズムのリサーチ・プログラムとして検証可能なものと捉える立場が主流派となり、問題は終結したと言える。

³⁹ Толстой. Полное собрание сочинений. Т. 25. С. 338-339.

⁴⁰ 三浦俊彦『ゼロからの論証』、青土社、2006年、108-109頁。

のなかに隠れ、もう一方の端では、空間、時間、原因に依存しながら、現在時点における人間の自由の意識が動いている。我々の眼前で、この運動の範囲が広がるほど、この運動の法則はよりはっきりしてくる。この法則をとらえ、定義づけることが歴史の課題となる。⁴¹

「歴史的運動」の原動力は確実に存在している、しかし不可知である。要求されている課題は「人間の意志の運動の線」、すなわち極限小の一人一人の人間の生の営みが集まって作り出す全体的な生のありさまを「明確にすること」である。この点に関連して、中村唯史の「歴史原理の不可知性とは、トルストイの場合、それが言語化できず、したがって伝達しえないものであることを意味していた」⁴² という指摘に目を向けよう。それにも関わらず、ダーウィンの進化理論は無目的な淘汰プロセスでもって歴史を「語る」ばかりか、本質的に空虚であるような「偶発性」を基礎に置くことによって明確にできるものはなにも存在しないようなカオスをもたらす。そもそも、世界の中で生物個体が生き残りをかけて互いに争っているとすれば、「全体的な生」のことなど望むべくもない。つまりトルストイにとって、ダーウィンは二重三重に違反しているのだ。⁴³

自然と歴史をめぐるトルストイの問題意識について、紙幅の都合上これ以上述べることはできないが、本章前半部で述べたように進化と発展的進歩観の区別も曖昧な（そのためダーウィンの「物語り」のテーマがほとんど理解されなかった）時代にあつて、トルストイはダーウィンの理論の特殊性を理解し、それ故に進化論を拒絶するに至ったことを指摘しておきたい。

3-1. チェーホフの読書

チェーホフが大学時代からダーウィンに強い関心を寄せていたことは周知の事実である。全集の注釈によれば、チェーホフの蔵書の中で現在確認できるダーウィンの著作は『家畜栽培植物の変異』のみだが、書簡や作品の内に見出されるダーウィンへの言及からすれ

⁴¹ Толстой Л.Н. Полное собрание сочинений. Т. 12. М., 1940. С. 338.

⁴² 中村唯史「トルストイ『戦争と平和』における「崇高」の問題」『山形大学人文学部研究年報』第8号、2011年、137頁。

⁴³ もっとも、ダーウィン自身は「あらゆる事物のはじめという神秘は、われわれには解きえない。私個人としては不可知論者にとどまらざるをえない」と『自伝』に書いている。ノラ・バーロウ編（八杉龍一ほか訳）『ダーウィン自伝』筑摩書房、1972年、79頁。何より『種の起源』はトルストイがそう考えたように「種の起源の問題」について論じているのではなく、事物がどのようにして現在の姿になったかという過程について論じているのだが。この差は両者の歴史観の差であると考えられるが、それはすでに別の議論であろう。

ば、彼の読書がこの一冊の本に留まっていたとは考えられない。1890 年、サハリン調査の途上にあったチェーホフは手紙の中で、友人の女性数学者クンダーソヴァにダーウィンの旅行記を渡してくれるように頼んでいる。ダーウィンの著作に旅行記と言えるものはひとつしかないの、これは『ビーグル号航海記』であると見て間違いない。また、『隣人たち』(1892) の異本ではトルストイの無抵抗主義を軽々に批判する兄に対し妹が「この問題に誠実に、有頂天になって、ダーウィンが自分の『種の起源』を書いた時のような[...] エネルギーでもって、取り組みなさい」(5:589) という場面がある。⁴⁴

より早い時期に書かれた作品にもダーウィンの名が認められる。1883 年の 4 月に書かれた『フィラデルフィアにおける博物学者大会 (学問的内容の論文)』は学術的報告文の体裁を取り、全面的にダーウィンの進化論の「もじり」と言える作品である。冒頭の「一番初めにダーウィンの思い出に捧げる研究報告『人間の由来について』が読み上げられた」(2:130) という一文からダーウィンの同名著作が示唆された後、個々の民族の定型的性質が「豚」「ワニ」「カササギ」「キツネ」「魚」などの動物の比喻を通して滑稽に描かれている。以上から、『家畜栽培植物の変異』と並んでチェーホフが『ビーグル号航海記』『種の起源』『人間の由来』など、広くダーウィンの著作を手にしていて可能性が十分に指摘できる。

同じ 83 年に、人物の内に動物の特徴や形態の類似を見る描写が集中的に確認されることに注目したい。6 月の『山羊かならず者か?』ではタイトルにもある通り、うたた寝をしている娘が自分に迫ろうとする好色漢を夢の中で山羊と取り違える (2:160)。あるいは 83 年 8 月の『アルビヨンの娘』において、イギリス人の家庭教師を雇い主が「いもり」と呼び「鼻はハゲタカそっくり」だと罵る (2:196)。A. グロスマンは『チェーホフの自然主義』というエッセイの中で次のように断言している。『種の起源』の作者は、人間の動物的な由来についての自らの基本的な結論でもって、チェーホフの、人類についての慰めのない哲学の中に主要な基盤の内のひとつを持ち込んだ。自らの主人公たちの中に射止められた鳥や傷ついた獣を見るというチェーホフの不変の傾向は、部分的には、彼の世界観におけるダーウィニズムの要素によって説明される」。⁴⁵ 必ずしも「射止められた」り「傷ついた」りしているわけではないにせよ、そうした見方をチェーホフがいち早く作品に取り入れたことは疑いがない。重要なのは、これらの動物メタファーが積極的かつ喜劇的に描かれることで、上で見たドストエフスキーやトルストイの場合と異なり、チェーホ

⁴⁴ チェーホフのテキストは *Чехов А.П. Полное собрание сочинений и писем в 30 томах. М., 1974-1983.* を参照し、括弧内に巻数と頁数を示す。書簡は П. とする。訳は拙訳による。

⁴⁵ *Гроссман Л.П. Собрание сочинений в 5 томах. Т. 4. М., 1928. С. 211-212.*

フにあつては人間と動物の同位が憤慨とも拒絶とも遠いものとなることだ。このような描写法の背後に、人間と動物が同じ共通の祖先から進化してきたことを認め、その間に一切の優劣差を設けないダーウィンの理論の影響を見出すことは困難ではない。本稿はチェーホフが大学で医学のみならず生物学や動物学の教育を受けた医師であり、ドストエフスキーやトルストイとは異なる科学的素養の持ち主だった点を鑑み、⁴⁶ 19世紀末の「科学者」チェーホフに対するダーウィニズムの関係を考察したい。以下、主に論文「性の権威の歴史」構想をめぐるこのことを検討していく。

3-2. 「性の権威の歴史」：『人間の由来』との関係

「性の権威の歴史」は当時ロシア社会で隆盛していた女性問題をテーマにした学術論文である。論文は結局書かれることはなかったし、兄アレクサンドルに共同執筆を持ちかけた手紙から読み取れるその構想も、短く断片的なものに留まっている。とはいえ、科学に対するチェーホフの熱心な関与のあり方を推察するための資料としては十分である。

まずチェーホフは女性をめぐる問題を「自然科学の領域で検討する」とした上で、「僕の論は我が国の女性解放論者たるジャーナリスト諸氏の論にも、頭蓋骨計測論者の論にも似ていない」と述べる（П1:63）。注目したいのは後者である。川島静によれば、当時「男性は女性より優秀だということを実証する目的で、男女の脳の容量が計測され比較された」。「頭蓋骨計測論者」とはつまり「保守的な女性観を正当化するために生物学を引き合いに出す人々」であった。⁴⁷ このような「実証」の仕方の潮流の大元になったのは、言うまでもなくチェーザレ・ロンブローゾであろう。ロンブローゾ自身は、まさにダーウィンの進化理論、特に「隔世遺伝」（先祖返り）の概念に着想を得ていたのだが、「隔世遺伝によって血を好む性癖をもつ退化した人間」の一種として生物学的「犯罪人」を特定できるとしたロンブローゾの説の疑似科学性は同時代からすでに疑いの目を免れないほどであった。⁴⁸ 「生物学を引き合い出す」ことで自己を正当化する、そうしたロンブローゾ的なやり方と自分は違うと言い切るチェーホフは、手紙の中でバックルやスペンサーなど多くの名前を挙げているが、やはりダーウィンに一番多くを負っていたように思われる。この論文は第一にその着想の点で、第二にその方法の点でダーウィンの『人間の由来』に近しい

⁴⁶ チェーホフは公私にわたってチミリャーゼフと交遊があったことも述べておきたい。

⁴⁷ 川島静「チェーホフの論文構想『性の権威の歴史』におけるジェンダー観——帝政末期の女性教育と関連して」『むうざ 研究と資料』第27号、2011年、56頁。

⁴⁸ 井上真理「見ること、見えること、見せること——『台風』四部作とロンブローゾ＝ノルダウの枠組み——」『学習院大学人文科学論集』第17号、2008年、169-171頁参照。

からである。

第一の点に関して、ダーウィン研究者の長谷川（小川）眞理子によれば「同種に属する雌雄の間の差」は「科学的に説明するべき問題」であると初めて指摘したのはダーウィンその人だった。⁴⁹ 同種に属する生物であっても、なぜ雄と雌はさまざまな点で異なるのか。従来「そういうものだ」として単に見過ごされてきたことを問題化したダーウィンの「慧眼」に、女性問題をあくまでも「自然科学的方法」によって解決するつもりだと宣言する時のチャーホフは接近している。第二の点に関して言えば、昆虫、魚、鳥類、そして哺乳類を順次、網羅的に比較することをチャーホフは計画していた。この構成と方法は、軟体動物をはじめとする単細胞生物から始めて昆虫、魚、両生類、爬虫類と進んで行き、鳥類を経て哺乳類からヒトに至る「すべての綱の動物の第二次性徴を取り上げ」る『人間の由来』と多くの点で似通っている。⁵⁰

実際、構想を兄に書き送った中で、チャーホフは「各々の綱・類における統計的研究と一般的結論。ダーウィンの方法だよ。僕はこの方法がおそろしく気に入っているんだ」と述べている（II:65）。確かに、着想から出版まで 20 年にわたって観察記録を蓄積し続けた『種の起源』に限らず、ダーウィンの著作は常に膨大な数のデータに溢れ、「各々の綱・類における統計的研究」から「一般的結論」を導くスタイルに一貫している。

とはいえ、このような方法はダーウィンに限ったものではなく、自然科学に共通のものでもある。してみると、チャーホフにとってダーウィンの進化論はその自然科学的側面においてのみ興味深いものだったのだろうか。この問題に答えを出す前に、若き医学生が自らの「性の権威の歴史」のどの点が画期的であると考えていたかを見ておきたい。そのことは、彼のダーウィン理解を明らかにする手助けをしてくれるだろう。

3-3. 二重の視点——チャーホフとダーウィンの呼応

まず、『人間の由来』でダーウィンが突きあたった限界を一瞥しておきたい。雌雄の差の問題は人間社会のジェンダーの問題と容易に結びついてしまうために、性差を科学的に説明しようとしたダーウィンもまた、当時の常識的偏見から逃れ切ることはできなかった。著作の大半を占めるのは雌をめぐる雄間競争と雌による選り好みについての議論である

⁴⁹ 長谷川眞理子「ダーウィンの性淘汰の理論とヒトの本性」長谷川眞理子ほか著『現代によみがえるダーウィン』文一総合出版、1999 年、216 頁。

⁵⁰ チャールズ・ダーウィン（長谷川眞理子訳）『人間の進化と性淘汰Ⅱ』文一総合出版社、2000 年、47 頁。

にも関わらず、関心の対象をヒトに移すや否や、ダーウィンはヒトの男性は女性よりも体力、知力、勇気の点で自明的に優れているという立場を取り、これまでの議論とは反対に女性の美しさをめぐる男性の選り好みについて論じている。明らかに、最終的な議論は当時の常識的偏見に押さえられてしまっている。その結果、ヒトの男女に性差が生じる原因についての議論は、他の動物の場合に比べずっと散漫な——こういう言い方をするならば、厳密に科学的であるとは言えない——ものとなってしまったのである。

これに対しチェーホフは、複数の類の性差についての自らの観察を述べながら、鳥類において抱卵がきっかけとしてオスとメスの間に筋力の差が生じ、それが権威（性差）発生の原因だとする。そして、自然自体は「不平等を許さない」のだから、権威のより少ない有機体としてヒトを含む哺乳類を生み出す。これらの動物でも、「9 ヶ月にもおよぶ妊娠期間」のためにメスの筋力低下が生じるので、権威は残っている。しかし、いずれ自然が「哺乳類よりも高位になる有機体」を作り出す時には、妊娠期間は短縮されるか、全然別の手段で子を成せるようになるはずで、ついには権威が消滅すると結論している（Ⅱ1:64）。正誤のほどはさておくとしても、子孫を残す上での雌雄の役割の差に注目したこの結論は、ダーウィンが陥ったような常識的偏見とはひとまず関係がない。論文は科学的なものであり「独創的発想」（Ⅱ1:65）であると自負する時、チェーホフはこの点を念頭に置いていたのかもしれない。

さて、性差についてのこうした自然科学的見解の後、チェーホフは「二番目の論点」として次のように構想を続ける。哺乳類、特に「ヒトおよびサル」において「権威はさらに弱い」。それにも関わらず、実際には人間社会では男性と女性の間に明確な差が存在する。チェーホフの考えによれば、人間における男性優位は創造能力の有無と関わっている。彼は書いている。「完璧な有機体は創造する、ということを思い出してほしい。女性が創造しないとすれば、つまり、女性は完璧な有機体にはまだ遠いということであるからして、完璧な有機体により近い男性に比べて弱いということになる」（Ⅱ1:66）。注目したいのは言葉の順序だ。女性は生物として「完璧な有機体はまだ遠い」から「創造しない」のではなく、その逆に、女性は「創造しない」ために生物として「完璧な有機体はまだ遠い」のである。ここで挙げられているジョルジュ・サンドに限らず、書簡を見れば、彼の助言を仰いだ女性の小説家志望者たちから、すでに名声を獲得していた内外の女流作家、女優に至るまで、女性の創造行為に対しチェーホフが基本的に冷淡な態度を示した例が多く見つかる。だが、女性の創作に対する賛美が容易く行われなかったことは、「女性である」というだけで好意的な評価を与えることをチェーホフがしなかったことの逆説的な表れで

ある。⁵¹ 強調しなければならないのは、チャーホフの注意はあくまでも女性の文化的な創造能力に向けられており、生物的能力はここでまったく度外視されているということだ。女性問題をめぐり当時の「女性解放論者」と「頭蓋骨計測論者」は、共に、生物学的観点と文化的観点をないまぜにしていた。つまり、前者は女性に固有の特性——たとえば「女性は生まれつき、より演繹的である」⁵² といった——を称揚し、だからこそ女性は解放されもっと社会で活躍すべきであると言う。後者は女性の方が男性より骨格的に小さく、それ故頭蓋骨も小さく、脳の容量も小さいので生まれつき男性より劣っており、今後も劣っているのだから、社会におけるその立場を向上する必要もないのだと言う。これに対してチャーホフは、川島静も指摘している通り、「生物学的な視点」と「社会学的な視点」を分断している。⁵³ 農村でそうであるように、男女が等しく教育され日常の労働も等しいものであれば、「上流階級や中流階級に見られるような顕著な権威」は見られないというザッヘル＝マゾッホの見解を彼が好意的に紹介していることは興味深い (II:66)。そして「二番目の論点」に対してチャーホフは次のように結論する。

女性が今はまだ馬鹿だからといって、今後賢くならないとは言えない。自然は平等を志向しているのだから。自然を妨害すべきではない——それは愚かなことだ、ばかげているし、どのみち無力なんだから。自然がニュートンたちの頭脳を、完璧な有機体に近づきつつあるたくさんの頭脳を作り出して人間を助けてくれているように、人間も自然を助けなくては。(II:65)

後にチャーホフが『アリアドナ』(1895)の中で「脳みその目方が男性より軽いとか、そのために科学や芸術や文化一般の問題に無関心でいてもいい」(9:130)と女性に教え込むような教育のために、女性が男性に劣るようになるのだと人物に言わせたことも考え合わせると、人間における権威の原因を生物学的要因から切り離すことで、チャーホフは——かなり際どい口振りではあるが——「将来において」今あるのとは違う状態が生じ、人間の男女間の権威がなくなる可能性を残そうとするのだと言えよう。

そのように考えた場合に、人間に考慮しない自然の巧みな采配と、人間のもろさの対比もまた彼の結論に含まれていることは重要である。なぜなら、「完璧な有機体を志向する

⁵¹ 事実、男女を問わず新進の作家の作品にチャーホフはいつも丹念に目を通していたし、リジャ・アヴィーロワに1895年2月15日に送ったのと同じ助言——「郡会長」のような俗的人物像を避け、描写は簡潔であるように努めることなど——をゴーリキーへも1899年1月3日に書き送っている。

⁵² Этюды Г.Т. Бокля, автора «История цивилизации в Англии» с биографией и фомографическим изящным портретом автора. Пер. с англ. под ред. П.Н. Ткачева. СПб., 1867. С. 180-181.

⁵³ 川島静「チャーホフの論文構想『性の権威の歴史』におけるジェンダー観」、59頁。

ために、自然は不平等や権威に必要性を見出さず、やがては不平等や権威がゼロに等しくなる時がやってくるだろう。哺乳類よりも高位になる有機体では、これもまた母体の筋萎縮の要因となる9ヶ月もの妊娠期間の後に出産することはなくなるだろう」(Π1:64)というチャーホフの結論は、一見ラマルク的な発展的進化観を示しているようだが、事実はまったく逆だからだ。本稿第一章でのラマルク進化論に関する言及を想起してほしい。「あらゆる生物は単純から複雑へと順序良く漸進的に変化する」という原理にのっとって、「現在複雑な構造をもつ生物はより昔に生じ、単純な生物はごく最近生じた」とラマルクは考える。⁵⁴ 言い換えれば、「哺乳類よりも高位になる有機体」はラマルクの説では発生し得ない。後に出てきたものが先に出てきたものを追い越すことはできないからである。安定した現在を最重要視するきらいのあるラマルクの目に映じる世界は、調和のとれた、実のところ静的な世界である。ここでは自然は、人間のために仕事をしているのではないにしても、人間の特権的立場を黙殺してくれ、多少の敬意を払ってくれているかのようなのである。

これに対し、チャーホフは現時点で「最も完璧な有機体」として「ヒトとサル」を並べて論じ、その上「哺乳類よりも高位になる有機体」について平然と語る。「不平等を許さない自然」がいつどのような時に人間から暫定的首位を奪おうと問題はないのである。明らかにチャーホフは、「人間がほかとは別の奇跡によって出現したと信じるのは[...] 必要なことともありそうなこととも思っていない」⁵⁵ と明言するダーウィン同様、人間にいかなる特別な由来も地位も与えていない。さらに、『種の起源』でダーウィンは次のように書いていた。「自然淘汰は[...] それぞれの生物を、その有機的ならびに無機的生活条件に関して改良する仕事を、黙々と人知れず続ける」(p. 133)。自然の仕事はまさに「人知れない」ものなのだ。改良はあるにせよそれは人間のためではなく、「盲目」の自然の手によって否応なく進められているにすぎない。チャーホフの自然もまた、「人間を」より完全にし、人間間の不平等をなくすことを志向しているのではない。「不平等を許さない」という自らの本性にのみ自然は従い、そのためには人間よりも高位に立つ有機体を作り出すかもしれないのだから。この観点に立てば、人間における男女間の権威は結局なくならないかもしれない。自然には着々と進むプロセスが存在している、だがそれは人間のためではないし、そこには「一切目的がない」。チャーホフはダーウィンの理論の科学的本質をとらえていた。そして、理論の科学的本質への沈潜によって立ち現れてくるのは、不確定で動的な世界、「発達と死滅の可能性をともに秘めた、あふれんばかりの現在の基

⁵⁴ 河田雅圭『はじめての進化論』, 27 頁。

⁵⁵ Darwin, Francis ed. *The life and letters of Charles Darwin, including an autobiographical chapter* (London: John Murray, 1887), vol. 2. pp. 263-264.

盤」に他ならない。そのような世界のただ中であって、「現時点でこうだ」ということと異なる「将来はこうなるかもしれない／ならないかもしれない」ことを見通す二重の視線、ダーウィン自身の言葉で言えば、「遠い将来」に「開けている野 (field)」を「見通す」まなざし (p. 458)、このような「物の見方」の内に、きわめて細い線には違いないが、われわれはダーウィンとチャーホフの呼応を見出すのである。

次のように結論することができるだろう。既に述べたように、ロシアで文学界を含め幅広いジャンルに渡る知識人が進化論について論じた時、目に見えない形であれ常に争点となっていたのは、進化論の非人間的性格が社会や人間にもたらす影響だった。これに対しチャーホフは進化論の社会に対する影響、すなわち社会ダーウィニズムに向かおうとはせず、自らの科学的素養のために、生物学的な視点を保ち、一方で絶え間ない変化を非目的論的に説明する科学的方法として進化論を理解し、他方で同時に、偶然に左右される世界に対する二重の視線、「物の見方」としての進化論の理解に向かったのである。

おわりに

探るべき事柄は、しかし、まだ残されている。ダーウィン自身は自らの理論が暴かずにはいない自然の悲観的側面が社会や人々の心にある種の動揺を与えることを自覚しており、生存闘争が必要とする絶滅や死概念の過酷さをやわらげるために「自然の闘いはたえまなくはない、恐れは感じられない。死は一般に瞬時である。そして強壮なもの、健康なもの、幸福なものが生き残り繁殖するのだ」(p. 129) と弁明を試みていた。このように言う時ダーウィンは、科学を論じる立場としては明らかに危ういところまで到達している。それでも「自然の「説明」と歴史の「理解」の両者がともに本質的な要件として切り離せないかたちで保持されている」⁵⁶ 特異な理論である限り、あらかじめ定められたものが何もない世界の中、おびただしい死滅と退化の上に諸々の生物が繰り広げている「歴史」についてダーウィンが「語ろう」とする限り、人間的感情に対するこのような「やわらげ」はぜひとも必要なものだった。そう、トルストイがその「語り方」、あるいは「語る」ということそのものを越権行為と見なした、進化理論の「歴史」的側面をチャーホフはどのようにとらえていたのだろうか。

もちろん、1883 年のチャーホフにすべてを求めることはできないが、彼が「二番目の論点」——自然では平等なはずの人間の男女に社会では明確な差が存在すること——を議

⁵⁶ 吉川浩満『理不尽な進化』, 324 頁。

論するため、自らの「専門」として「博物学とイロヴァイスキーの歴史の間の空白についての弁明」という項目を上げていることは示唆的だ（П1: 65）。ブロックハウス・エフロン辞典によれば、「古代ロシア国家がいつ、どこで、どのように誕生したのか」という問題をめぐって、ネストルの年代記の信ぴょう性の審議や各地に散らばり残された地名や名前の言語学的解釈、あるいは各々の論客のイデオロギー的立場が絡み合った論争に、歴史家イロヴァイスキーは古代ロシア国家のノルマン起源を否定する形で参戦し、アゾフ海沿岸における独自の土着起源説を主張した。⁵⁷ いわゆるこの「ヴァリャーグ問題」についてここでこれ以上詳しく述べることはしないが、言葉に端的に表れているように、人間が語るこのような「歴史（история Иловайского）」と、「博物学／ナチュラル・ヒストリー（естественная история）」との間にチェーホフが開きを見ていたことは明らかだ。踏み込んで言えば、それは科学的な「説明」と歴史的な「理解」の「空白」である。埋め難いブランクに彼がどのように断りを入れるつもりだったのかは、上の一文からは判断できない。それでも、見てきたように、この「空白」こそ進化論が動く舞台であったことは強調するに値しよう。人間から遠ざかろうとする科学的知と人間の生の実感の間で、動的であることを良しとするようなまなざしが、自然や歴史の表象をめぐって晩年の彼とダーウィンを再び近づけることになるだろうと、筆者は予想している。

⁵⁷ Энциклопедический словарь. Репринтное воспроизведение издания Ф.А. Брокгауз, И.А. Ефрон. 1890. Т. 20-а. СПб., 1991. С. 938.